



1998年2月13日第三種郵便物認可 2016年12月20日発行(毎月1回20日発行)

たこの木通信 350号

350 * 350 * 350 * 350 * 350 * 350 * 350 * 350 * 350

たこの木通信



새로운 길 운동주

내를 건너서 숲으로
고개를 넘어서 마을로

350 350

민들레가 피고 까치가 살고
아가씨가 지나고 바람꽃이 핀다

나의 길은 언제나 새로운 길
내일도... 내일도...

내를 건너서 숲으로
고개를 넘어서 마을로

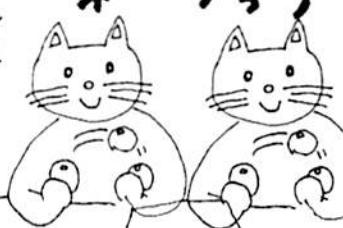
350

350



타코노기 클럽

350
350



1-マライゼーションの原理

- ① 1日の 1-マリな リズムを提供すること
- ② 1-マリな 生活上の目標を提供すること

③ 家族とともに過ごす休日や家族単位のお祝いや行事等を含む1年の1-マリな
リズムを提供すること 판다누스 보니 네시스 Pandanus boninensis

④ ライフサイクルを通じて、1-マリな発達上の経験をする機会をもつこと 350

⑤ 本人の選択や願い要求が可能な限り十分に配慮・尊重されなければならぬこと

⑥ 男女両性がともに住む世界に暮らすこと 350 350 350

⑦ 1-マリな経済水準が与えられること

⑧ 病院・学校・図書館・本屋・雑誌屋などの毎日王的基業が、一般の市民の

同種の方施設に適用されるのと同等であるべきだということ。

판다누스목
위키백과, 우리 모두의

350 350 350

タコノキ
Pandanus

(植物) Pandanus (学名: Pandanus)

판다누스목

제350호 2016. 12. 20発行

定価100円

350

350

350

発行：たこの木クラブ

〒206-0025

東京都多摩市永山1-1-4ルミエール103

TEL/FAX: 042-389-1378

E-MAIL: takonoki@s7.dion.ne.jp

郵便振替: 00100-2-24685

타코노기 클럽



타코노기 (ハチノキ)
分類: 植物界 Plantae
門: 孢子植物門 Marchantiophyta
綱: 蕨類植物目 Polypodiopsida
目: 蕨類植物目 Polypodiopsida

350

350

350

Pandanaceae
Pandanaceae
Pandanaceae

From Wikipedia, the free encyclopedia.

Pandanaceae is an Asian species of plant that is endemic to West African forests in the Dufay Forest-Savannah forests and Rainforests-Livistona dry forests of the Ossamara Islands, Japan.^[1] It has aerial prop roots and grows on rocks.^[2] The genus *Pandanaceae* contains 10 species of plants that are found in West Africa and

in the Philippines.^[3] The genus *Pandanaceae* was first described by Carl Linnaeus in 1753.^[4] The genus *Pandanaceae* is closely related to the genus *Monstera*.

드론카드 풀류 체계(1981년)에서는
위의 전남성 아강에 유행한 과로써 아관과 같이
• 판다누스과 (Pandanaceae)

睦月 むつき

こよみ



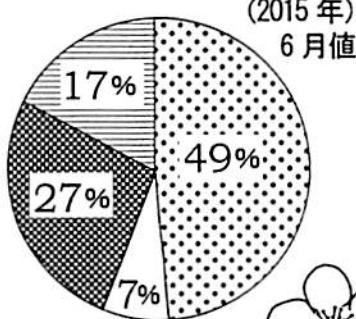
1月の暦

@荒木

日	月	火	水	木	金	土
12/11	12	13	14	15	16	17
				(通信発行作業)		
18	19	20	21			
			大そうじ			
25	26	27	28	29	30	31
				年末年始休み		
1/1	2	3	4	5	6	7
				当事者の会		
8	9	10	11	12	13	14
				すいいち始め		
15	16	17	18	19	20	21
				(通信発行作業)		

2016年どんな年だったか?「差別と分断の年」私の印象です。しかし世界のパラダイムシフトが目に見えてきました。困っている者同士、いかにお互いが目に入るか、どんな工夫ができるか。でも人間のことは半分くらいにしたい。余白・空虚・無音・無常で呼吸を整える。何はともあれ感謝しつつ、皆様にとって健やかな年末、穏やかな2017年始めになりますように。

■生活保護利用者世帯構成



- 高齢者世帯
- 傷病・障害者世帯
- 母子世帯
- その他の世帯

(出典:厚生労働省 非保護者調査)

■世帯類型別の保護世帯数と構成割合の推移

資料:被保険者調査(平成26年7月概数)

10年度前と比較すると、特に可動年齢層と考えられる「その他の世帯」の割合が大きく増加。

◆平成16年度(2004)

	被保護世帯 総数	高齢者世帯	母子世帯	傷病・障害者 世帯	その他の 世帯
世帯数	997,149	465,680	87,478	349,844	94,148
構成割合 (%)	100.0	46.7	8.8	35.1	9.4

資料:平成16年度福祉行政報告書

◆平成26年7月(概数)(2014)

	被保護世帯 総数	高齢者世帯	母子世帯	傷病・障害者 世帯	その他の 世帯
世帯数	1,600,702	755,810	108,315	453,983	282,594
構成割合 (%)	100.0	47.2	6.8	28.4	17.7

約3倍増

平成26年度保健師中央会議 生活保護受給者の動向等について 平成26年10月20日(月)

2016年を振り返れば……

いつの間にやら2016年も終わりが近づいてきました。(年が明けると今度は、2016年度末がすぐにやってくるのでややこしい私)

2016年頭。「自分の足下でいろいろ起こる年」と予見したら見事に的中!(的中して欲しくはなかったけど)。年の初め頃にあった依頼は、断るか「当日参加でよければ」と返事していた。去年や一昨年のように引き受けていたらとんでもないことになっていたかもと振り返る。又、昨年初めて開催した重度訪問介護従事者養成研修(行動障害課程)は、今年も実施する事としたが諦めた。

世の中とんでもない事がどんどん起こっているが、それどころではない身近な場所での状態。

市内外からのお誘いに対し「今は関われないけど、関心はあるので情報だけはお伝えください」と何度も返事したことか。頂いた情報に目を通す気力もないほどに日々に追われまくった2016年。

今年の手帳を見れば、書き込まれた予定は例年よりも少ない。時間的な余裕のなさよりも考えなければならない事柄の忙しさに追われていたのだろうと振り返る。

来年30周年を迎えるたこの木の過去を振り返ると10年周期で大きな変化が現れている。年頭の予見は大きな変化の手前にある悶々とした状態の時期を何度か経験したから出てきたように思う。

たこの木が発足からの10年は、「子どもたちどうしの関係づくり」。10年~20年は、育ってきた子ども達が成人する事で生まれる「個別の当事者支援」。20年~30年は、個別の支援を実現するための「事業化」を巡るやり取り。

では、30年~40年目は?何をどのように展開すれば良いのか悶々と悩む期間に入っているような気がします。

「ライフステージのすべてに渡っての支援」という言葉を耳にしますが、子ども達を取り巻く課題に始まり、出会った人たち一人一人から与えられた課題は、「ライフステージのすべてに渡っての支援」で、一つ一つの課題に対する取り組みは小さいものの、その中身は多岐に渡っているように思います。これは「障害者問題」などという話ではなく、「地域」という場の中で出会う様々な人の存在から様々な課題が与えられ、また様々な人の存在がその解決に向けて取り組んでいるからのように思います。

ただ、「良い支援?」や「ズレてる支援!」が世に出て、たこの木の取り組みが知られる中、私自身の手が届く範囲や動ける範囲を超えたものが寄せられ、これまでの取り組み方では成り立たないものをあれこれ考えさせられています。

関係が拡がる中で得られるものも増えましたが、一方で拡がる中で收拾が付けられない私自身の能力の限界を感じています。

逆に、この1年私自身の範囲に終始する中で、気づかなかつた事に気づく機会も得ました。上手く回っていると勝手に思っていた事の中に課題があるとか、繋がっているようで実はつながっていないとか。

勝手な思い込みで事を進めていた点を改めてとらえ返し、新たな1年に向けて取り組んでいきたいと思います。

年の変わり目にあれこれ起きたたこの木周辺。記事を書いた翌日に新たな事が勃発するかもしれません、この先の取り組みについて考えていきたいと思います。

知的の人⑦

横田彰敏

文学

岩本通信 60号 そしてボブディラン/ベル賞

おめでとう!!! 11年一連載60回なんぞ、私にとってはまだ踏みこんだことのない世界。

ついに今回たこの木通信350号!!!

そこで岩本通信の第1回目ってどんなだったの? うと言つてみた。

岩本通信の第1回目は2011年の5月号だ。

←この小ものは岩本通信1回目を縮小したもの。

最後の4行を拡大して、もとにもどしたのがこの文章。

「寝ながら考える時間がほしくなる。」とは並々ならぬ

文学的センス。バブルの頃
ユーロ・ピートがはやったのにボブディランを聴いて自分
がすごくみじめにおもえた。

そのボブディランが今年
ベル文学賞なんて
一世の中間にがおこな
かわからたり。

二点目は木曜日のあとすべが開始しななどから、このまでいったらまたしても、ついに水曜日の廃止は避けられない。もし水曜日すいいち無くなったら行く所がなくなるので廃止はやめて続けるしかない。と考えながらそこまでうまくやれれば達成かみえてくるのではとは寝ながら考える時間がほしくなる。



岩本通信60号と(111).たこの木通信350号と(111)
ボブディランのズレた歌(111)と(111).やり続けよという
のはおごい。私はつづけるといふのが苦手でスポーツ/ミム
もやめてしまった。(感心のあるちはたこの木通信342号.
343号の「助か者とスポーツミムを競んでね」).

長くつづけるコツはやっぱ「がんばらない」「手抜く」
という所にあるのではないだろうか?しかしどうして
ついついがんばってしまうし、急遽手を抜いてはいけない
所もあるので、やはりそれは続けれながら(111)がんばるする
いかに手抜くかという二つに磨きをかけていいかな?
といけないのかもしれない。そんな事を考えてみると
私はいつも医者として偉いなと思ってます。
これが私モリ.たこの木通信という場をかりて.
細々(ほそほそ)と続けていふことがあります。
ハングルで書いた。

타코노키 클럽



↑ = ◎ 不 フラフ

←これは韓国の介護のちがつ。
最近.たこの木クラブに石井修一
来た時に.書いてもらいました。
←これはこの時におみがけてもじた
チョコレートのつまみ紙の一部です。

あとス-110-猫毒ちゃんどんのライブア
クにいきました。110ワーアー70してしまつづいて23時を
超えました。

役に立つ話ふたつ

清水洋

(1) いつか役立つ話

養老さんの本だったか、脳は変化を好まず、安定が好き、というのがあった。こだわりが強く変化に弱い人と多くつきあっている身として何だかほっとする言葉だ。「原則に戻っただけ」というわけ。

キリンの首が長いのは、高い所の葉を食べるため進化した、と教わってきたが最近の進化論はだいぶ違う。ランダムな遺伝子の変異で多様な形態が生まれ、環境に適応した種が生き残ったらしい。生き物は安定した秩序を求める反面、時々は変化(変異)するという両面を併せ持っているようだ。目的を持って進化した人間が一番偉い、と近代以降の人たちは大いに勘違いをしてきた。変異(変化)こそ生き物の繁栄に貢献している。遺伝子だけを見て人為的に選別したり、都合よく操作できると思っていると、いつかしつぺ返しに遭う。

(2) すぐに役立つ話

ガイドでよく足の速い人と歩く。小走りでやっと追いつく経験をした方は多いだろう。ある時、「楽に速く歩ける方法」を会得した。コツは簡単。腰を少し上に伸ばして左右の足をまっすぐ前に出すだけ。コツをつかむと、まるでホーバークラフトで進んでいる感覚になる。いつもは苦労して追いつこうとしていた人をいつの間にか追い越していた。そして全く追いつかれそうもない。

この歩き方を知ったのは、ある時代小説を読んでいたとき。忍びの者の歩行の説明があった。ふつう常人は歩く時、前後・左右・上下に余分な動きをしている。腰を少し伸ばして足をまっすぐ出すだけで速く楽に進むのだという。やってみるとすぐにできた。おかげで何人の歩くのが速い人と同行するのが苦にならなくなった。国分寺でも皆に研修で教えて好評でした。

またある時、ヘルパーをしている人で、「あの人の歩き方は不思議だ。音もなく利用者にぴったりついて行くし、ただ者ではないかも…?」と言われている人に話を聞いたら、やはり山の民の末裔か、もしくは教えを乞うた人らしい。忍者で有名な伊賀や甲賀の人たちもまさしく山の民だった。私が身につけた歩き方のコツについて意見を聞くと、大いに共感して、その人の歩き方もほぼ上記に近いものだという。

すーっと抵抗なく移動する感じを覚えたなら初級は終了。次はそのまま右折・左折の練習。これはすぐできるはず。その次は、ゆるい上り坂。これもわずかな練習でOK。…ここまでが中級で、下り坂は少し難易度が上がる所以、初めは無理しない方がいい。

一度ダメモトでやってみてください。

今年もお世話になりました。ありがとうございました。

私は、アドラー心理学を貪欲に学びました。参考書でもよし、
参考書よりも自分で覚えた方がいい。とおもいました。参考書はうれしいけど、
つい何かしてあげたくなりますのは嬉しいが、アドラーという人は、
「参考すること」を定義している人も多い。あるいは「心理学」に定義
があるとは思わない。では「食事の時、「はし」にするか?
スプーンにするか?」。そのうち「心理学」の定義にはある?
普段の行動は「心理学」からくるか?自分が行動しているから?
老えるのは晩年ひまたった時にしようと見ています。
今、突然死の選択がタダになりました。そのときアドラーの「心理学」に
助けられています。
成長していくすべての人類のなまがれ、昔の常識から変わっていくこと、
古典的で素晴らしいのとそのままのこと。
それとともに自分も老いていくこと、
自分でしたいたい事があるのにまだできないことを教えようと。
そんなことを教えると。
この季節はタダで切なくなる。ところが、今年一年
していった感じたいた事に感謝をし、教えようと思います。
一つ一つして感謝をしていると、すぐにびっくりすることがあります。
まちどおりいのは、正月料理やおせちやです。・・・。
みんなの気持ちを伝えたい人に、今伝えますように。

筆寄

私の個人的「介護」史（17）

吉田宏史

離脱していった人たち

前回、介護ができない人たちを取り上げましたが、そのなかには介護から離れていく人たちがいます。私が学生の時には、2～3人ほどが介護を辞めていきました。その理由はさまざまですが、主たる順に3つだけ挙げるとするなら①授業に出られず単位が取れない、②サークルなどの活動で忙しい、③お金（交通費など）がない、というものです。私たちの先輩たちと後輩たちのあいだでもっとも隔たりが大きいのは、単位が取れないということだと思います。

Mさんの介護は、日曜日の夜から金曜日の昼までが学生介護者、そのほかをOBが担っていました。平日の昼に介護に入ると、丸一日の授業に出られず、夜の介護は昼との引き継ぎがだいたい9時ごろなので、午前中の授業には出られません。もっとも隔たりが大きいと書いたのは、授業への出欠、単位の可不可は、私たちの世代を中心にして感覚が全く違うからです。

私たちの先輩は、こんなことを言っていました。

「授業よりも大事なことが介護にあるんだ」

「授業なんか出なくとも単位は取れる」

「現に俺たちは毎日介護に行って、単位も取って卒業した」

今から考えると恫喝にしか思えないものも多々ありますが、現実に交わされていた言葉です。また私が1回生の時には7回生の「長老」がいました。まだ、大学の留年が時代的・意識的にもそれほど問題視されていない世代が残っていたのだと思います（ちなみに入学する前の年まで8回生が4人いたらしい）。しかし、もうそんな時代ではありません。私たちの少し下の世代からは、授業への出欠は、単位認定に大きくかかわるものになりましたし、いわゆる「代返」などは通じなくなりました。みんなが授業への出欠を深刻に考えていました。当然私も悩みましたし、私の同級生・先輩でも数人は留年してしまいました。

さらに、悩んでいる私たちに、先輩は衝撃的な言葉を投げつけます。

「留年した学費ぐらい自分で払え」

ウソみたいな話ですが、本当に言われました。授業料が数万円台だった時の先輩からです。私が学生のころで1年間の学費は50万円強。授業への出欠に苦しんでいるのに、どんなバイトをしようが1年間で50万円をつくることはどう考えても不可能です。こういう無理解な環境で、かつ前回書いたように介護ができないやら関係が作れないやらといふ

れることに嫌気がさした人たちが、介護から去っていきました。当然のことだっただろうと思います。

運動の「限界」

大げさなことをいうようですが、Mさんの介護をはじめとしたいわゆる「学生による障害者解放運動」なるものは、私が学生のころにはとっくに「限界」が来ていたのだと、あくまで個人的な体験をふまえて個人的な意見として、思います。しかしいまここでカッコつきで記しているのは、「障害者解放運動が限界にきていた」わけではないという思いがあるからです。当時、障大連の楠さんや南部の松井さんなどという、障害者解放運動の第一線で活躍されていた方がたくさんおられました。行政交渉も壮絶なものでした。いわゆる同和対策事業特別措置法（当時、地対財特法）が2002年に終わり、部落解放同盟の同盟員が急激に減少し、同盟員の不祥事が次々に明るみに出たこともあって、部落解放運動をはじめとしてさまざまな解放運動が下火というか、力を失ってきた時期ではありました。しかし決して、解放運動が終わりを迎えつつあったわけではないと思いますし、現在もまだ終わってはいないと思います。。ただ、学生をとりまく大学教育の環境や経済事情は、70年代や80年代のようなある種の「余裕」はありませんでした。いわゆる学生運動・社会運動としての考え方も薄れていきました。そういう意味で「学生が解放運動を支えることに限界がきていた」のではないかと推測します。そんななか、何とか学生たちを集めよう、引き留めようとする無理が、逆に前述のような世代間ギャップを生み、結果的に介護から離れさせることになったのではないかと思います。

では一方で、なぜ私は介護を続け、大学を卒業し、いまこのような文章を書いているのかと考えたとき、複雑な感情が起ります。私も介護に入っていたほかの学生と同様に、授業に出られずバイトもろくにできなかったのに、学生時代からOBになっても継続して介護に入れたのは何だったのか。世渡りがうまかったのか、親に経済的な余裕があったのか。物理的な介護の能力やコミュニケーション能力が高かったのか。結局のところ、私は周辺環境も含めた「介護をする能力」があったから介護を続けられたのかもしれません。そして、介護から消えていった人たちは「能力がなかった」のか。

でもそれはおかしい。そもそも障害者たちも介護者たちも「能力」などで人を分けないことを目指していたのではないか。でも現実には適応できる人とできない人がいて、言い過ぎかもしれませんのが介護から（同じ介護者によって、時には当事者によって）排除される人がいたのは事実です。私たちは「最後の過渡期」ともいえる状況を経験したのかもしれません。無理を続けることで無自覚に、自爆的に論理破たんを起こすような。

(つづく)

「男は走る」

私が陸上部に入ったのは偶然であつた。友人から入部しようぜベイビーと言われ何となく入った。先に止めたのは予想通り友人であった。

私は走り続け、毎朝1人で朝練に励んだが、中1の時初めて出た大会ではペペであった。中2になってもたいした結果も出せないまま日々は過ぎていった。練習のタイムはソコソコであり、遅くもないし、速くもなかった。しかし、中3になって初めて入賞した。朝練と午後の練習で毎日はクタクタだったが、充実した日々が送れた。

そして、タイムが伸び出した頃、引退の時期が来た。後少し、時間をくれたら、もっといい成績が出せるのにと最後に泣いてしまったことがある。

中1、中2は練習に必死について行き、中3になって初めて後輩に追い越されない様になかった。

その後、私の生活は受験勉強でいっぱいになってしまった。ただ、走りたかった。誰よりも速く、そしてその証しとして表彰台に立ちたかった。そこには純粋かはわからないが、走る喜びがあった。自分の可能性がどこまであるのか？追求する単純なものであったが、ただ速く走ることを考えていたのではなかった。人と比較するのではなく、自分の葛藤と戦うのであった。過去の私の弱い心と練習によって作られた強い心とがせめぎ合いその結果、タイムが伸びる。色々な天候や体調、メンタルの強さが大会ごとに試されるのである。

あれから、20年以上が経つが、あれほど一生懸命に追い求めたのは社会に出てからではない。社会は私個人がどんな結果を出そうが何の答えも与えてくれないからである。

鷹野 洋(がんの ひろし)

CVVの当事者スタッフ、介助者 CVV(Children's Views and Voices)とは、子どもの視点と声を大事にしながら、養護施設などで育った経験のある人たちをエンパワメントすることを目的に活動している団体です

『社会的養護の当事者支援ガイドブック
CVVの相談支援』

Children's Views & Voices+長瀬正子著

価格：900円

問い合わせ

大阪市北区西天満4・1・4 第三大阪弁護士ビル503号

葛城・森本法律事務所内

CVV事務局

Tel: 06-6130-2930 fax: 06-6365-1213

MAIL: yes_cvv@yahoo.co.jp



あしたや共働企画 & たこの木クラブ

『あしたや共働企画 & たこの木クラブ』。

私にとって最高の場所です。

どこか幸せを手に入れたい…そして久しぶりに横田さんから来いよ
と言われ、うれしくてこれからもずっとたこの木クラブを愛しています。
名刺交換などを通じ、仲良くなりました。

たこの木通信の1ページを頂いてありがとうございました。

うれしくて自分が何度も読み返していました。

あしたやでも読み返している人多いらしいです。

これからもねんばります。

〈記 上原理〉

全国公的介護保障要求者組合講演会報告 ～その2 65歳問題

障害者が65歳になると、それまで利用していた障害者総合支援法(以下支援法)による介護給付から介護保険による給付へ、行政が当事者に変更を求める、あるいは自動的に切り替える、ということが全国的に起きている。

支援法第7条では、「自立支援給付は、当該障害者の状態につき、介護保険法の給付、…国又は地方公共団体の負担において自立支援給付に相当するものが行われたときはその限度において、行わない」とあるが、「相当するものが行われたとき」との記載は二重給付の禁止が趣旨であり、同等のサービスでなければこの要件に該当しない。

支援法、介護保険どちらが優先かは別の問題である。

例えば、支援法で月100時間の身体介護給付を受けている人が、65歳になり、介護保険で60時間可能になった場合、支援法優先ならば、給付済みなので、介護保険からは給付されないが、介護保険優先の場合、介護保険から60時間、支援法から40時間給付となり、合計100時間はこれまでと同じように保障されなければならない。

どちらを優先するかは当事者に任されるべきである。しかし、現行法は、介護保険優先方式を採用している。これは、「保険優先原理」に基づくと言われている。

介護保険は、保険料負担と要保険事故に対応する給付に関係性があり、広く集められた一般財源による負担より優先するのは当然、という考え方である。

一般論としては一見合理的なようにも見えるが、障害者福祉にこれを当てはめることに、合理性があるのだろうか。

1、障害者総合支援法と介護保険

支援法と介護保険とは根本的に目的が異なる。

支援法は、憲法に基づく障害者基本法に則った法律で、法の下の平等を実現するための障害者福祉制度であるのに対し、介護保険は、高齢者の家族介護を社会的介護により支援していくという考え方である。

*宝塚ホームヘルプ訴訟事件 平成19年9月13日大阪高裁判決(確定)

「障害者福祉法の援助は、その基礎となるノーマライゼーションの思想に基づき、障害者の社会活動への参加という目的を見据えてなされるべきであるのに対し、介護保険法による保険給付は、これまでもっぱら家族によって担われてきた高齢者介護を、社会的介護により支援していくという観点からなされるものであるというよう、両者の目的及び機能は異なっており…」として、障害者福祉施策と、介護保険の立法趣旨が異なることを理由に、介護保険優先原則を通知した平成12年3月24日の厚生労働省通達「介護保険制度と障害者施策との適用関係について」を違法とした。

2、障害者の社会への完全参加と平等の実現へ向けて

*日弁連決議

2011年10月7日 第54回人権擁護大会において「障害者自立支援法を確実に廃止し、障がいのある当事者の意見を最大限尊重し、その権利を保障する総合的な福祉法の制定を求める決議」を満場一致で採択した。

社会保障における「保険優先原理」に普遍性などないし、差別禁止 平等原則を原理とする障害者福祉法制に保険原理を持ち込む理論も必然もない。

*障害者自立支援法意見訴訟原告団・弁護団と国（厚労省）との基本合意

原告団の主張に国が共感し、2010年1月7日、障害者自立支援法廃止の確約と新法制定にかかる基本合意文書が締結された。その中で、介護保険との関係について、「新しい法制度においては、障害者福祉の施策の充実は、憲法に基づく障害者の基本的人権の行使を支援する、というもので、いまだに被差別的立場にあり、経済的に劣った地位にある障害者の尊厳と平等を、基本的人権として公的に保障する制度が不可欠であるところ、保険集団の中での相互扶助という社会保険原理とは原則的に相容れない」と記載されている。

*障害者総合福祉法の骨格に関する総合福祉部会の提言

2011年8月30日 障害者制度改革推進会議総合福祉部会は、国連で採択された「障害者権利条約」と自立支援法違憲訴訟団との「基本合意」を基礎として、新法の骨格提言を出した。

- ① 障害のない市民との平等と公平 ② 谷間や空間の解消（障害者福祉施策を受けられない人の解消） ③ 格差の是正 ④ 放置できない社会問題の解決（社会的入院、地域の支援不足による長期入所、家族介護への依存）
- ⑤ 本人のニーズにあった支援サービス ⑥ 安定した予算の確保

*まとめ

「地域の実情に応じて」とか「分け隔てなく」などと、「地域での相互扶助」をもとに、公的責任が著しく低下・後退し、障害福祉支援の専門性も置き去りにされる流れが、強化される恐れが強い。

めざすべきは、障害者権利条約の国内法としての骨格提言の法制化である。

講演を聴き終えて

紙面の都合で割愛したが、65歳を機に支援法から介護保険への移行を迫る事例は東京でも生じている。当事者の人たちは、その都度闘わなければ生きていけない。社会の中で生きる、社会参加をする、あるいは生存すらも闘って勝ち取ってきた。闘わなければ社会生活がおぼつかないのが、障害者を取り巻く状況である。

「障害者とともに地域で生きる・働く」といったとき、共に闘う気持ちがなければ、これは成り立たないと考える。

(松島・記)

不安を抱き続けようと思った

(ほんの紹介、8回目)

今回、紹介するのは
『現代思想 2016年10月号緊急特集＝相模原障害者殺傷事件』の中で大澤真幸さんが書いた『この不安をどうしたら取り除くことができるのか』というエッセイ。

しかし、読み返してみると、このエッセイのことを以下ではほとんど紹介していない。ここから発想したことを書いただけだ。

ここで大澤さんは大昔のドラマ『男たちの旅路』(いまなら考えられないタイトルかも)というガードマンのドラマシリーズの「車輪の一歩」(これを大澤さんは名作と紹介している)で車いすユーザーに主人公が語る「迷惑をかけてもいいではないか」というセリフ(注)を例にとって、このエッセイ全体を以下のように結論付ける。

…私たちは次のように言えなくてはならないのだ。「他人に迷惑をかけたっていいではないか」と。いや、もっと先に行く必要があるかもしれない。ときには、他人に迷惑をかけるべきだと。私たちは、場合によっては、他人に迷惑をかけることを望まれてさえいるのだ、と。

ここまで言い切ることができたとき、こう断定する自信をもてたとき、私たちは不安をほんとうに払拭することができる。相模原障害者殺傷事件が私たちにもたらす、おぞましい不安を、である。

「迷惑かけていいんだよ」と断言できれば、事件がもたらす不安を払拭できると大澤氏は書くのだが、ほんとうにそうか。ぼくは迷惑かけられるのが嫌だけど、「ときには、他人に迷惑をかけるべきだ。私たちは、場合によっては、他人に迷惑

をかけることを望まれてさえいるのだ」と断言はできると思う、今は。でも、それで不安が払拭できるか、と聞かれるとあやしい。

いまの社会が抱えている問題が相模原事件の背景にあるのだから、不安は社会をどう変えるかという視点なしに払拭は出来ないと思う。

ここまでがこれを読んだ直後に書いたコメントだった。今回、この通信に掲載するにあたって、読み返して、付け足したくなったのが以下。結論が変わった。

相模原事件がわたしに与えた不安っていったいなんだろうと考える。それは【重い障害のある人が、誰かが考える「正義」の名のもとに、殺されてしまったこと】。

その「正義」、あるいはそれに隣接する考え方がある。どうやら、それは自分の近くにあるだけでなく、自分のなかにもある。この事件が私を不安にするのはそこなのだと思う。

「『迷惑をかけていいんだ』と断定する自信ができたとき、相模原の事件がわたしたちにもたらすおぞましい不安を払拭できる」と大澤さんは書くのだが、そのように断定できる自信がどれだけできても、あるいはもっと言えば、どんなにすばらしい社会が訪れても、私(たち)はその不安を払拭しないほうがいいのではないか。

『障害』がもたらす『出来なさ』の多くは社会が作り出していて、それを取り除く努力を障害者運動と呼ぶことができると思う。しかし、どんなに社会が変わっても残る『出来なさ』はある。さらに、その『出来なさ』は本人にとって、否定的なものとは限らない。そんななかで、私たちは不安を払拭すべきではないと思うのだった。だから、「＊＊出来ないから殺す」というひと自分を重ねることがもたらす不安を不安のまま抱き続ける必要があるのだろう。悲しいことだが、いのちを奪われる障害者がいなくなる日が来るかどうか、ぼくにはわからない。でも、それを減らそうとする努力はできるし、続けなければならない。

そして、『施設』にしか、生きる場が与えられない多くの人たちがいまも存在する。障害者は誰も、そこに収容されない権利があると日本政府も批准した国際条約があるにもかかわらずだ。

また他方で、『脱施設』という謳い文句の中で、施設を出る条件がないまま施設から出され「過重な介護負担を担っている母親たちが心を病んだり先が見えずに命を断つ事件が続いている」という指摘がある。

(ブログ『海やアシュリーのいる風景』

椿井康彦論文「知的障害者の脱施設化の論点に関する文献的研究」前

<http://blogs.yahoo.co.jp/spitzibara2/65426152.html> のコメント欄参照)。

『脱施設』は絶対に間違ってはいないと思うが、それを可能にする条件がないところで強制されると、そこに悲劇が生

まれるということは容易に想像できる。

しかし、十分に条件がないからと逡巡していても現実は変わらない。条件を整える努力を続けながら、少しでも可能なところで施設から抜け出していく勇気を持つ必要もあるだろう。その抜け出した後の負担を母親だけが担うという事態は絶対に避けなければならない。

また、同時に「独り暮らしのアパートが地域だと思ってるけど、施設の延長になっちゃってる」という話もある。『障害者運動のバトンをつなぐ』(日本自立生活センター企画編集、2016年、生活書院発行)収録の対談で熊谷晋一郎さん。ホントはこの本の紹介を書きたかったのだけど、読み終わったのが締め切り直前で間に合わなかった。

ともあれ、そのように複雑で単純ではない現実の社会だが、一つひとつの出来事は意外に単純だということもある。複雑なことは複雑なこととして捨て去ることなく、しかし、目の前にある単純なことを解決する努力も続けたいと思う。

そんななかで、相模原の事件がもたらした不安は不安として胸に刻み、抱き続けることも大事なことなのではないか。

そんな風に思ったのだった。

つるたまさひで

(大田福祉工場／原爆の団丸木美術館／ピープルズプラン研究所)

注「車輪の一步」というドラマ、dailymotionというサイトに上がっていたので、見て、セリフも確認しようと思ったが、前半を見たところで寝てしまって締め切りを迎ってしまった。

たこの木インフォメーション

◆下半期に入りましたが 2016年度会員まだ募集中です◆

皆さんたこの木会員へのご登録をよろしくお願ひします。

たこの木会員 ¥6,000/年 贊助会員一口 ¥3,000/年

通信購読会員 ¥1,200/年 目標額 120万!!

郵便振替 00100-2-24685 たこの木クラブ

※財政難のたこの木クラブを資金面から支えてください！！

※新規会員になられた方へは、たこの木通信4月号よりお届けします。ぜひ今年度の会員になってください！！

◆たこの木とその周辺のこれから予定◆

日時	内容			場所
《定期の予定》				
・毎週水曜日	13:00~18:30	すいいち企画	たこの木ひろばにて	
・第3木曜日	10:00~17:00	たこの木通信発行作業	多摩ボラセン永山分室	
2016年12月				
21	水	10:30~	たこの木ひろば大掃除	
28	水	18:00~	たこの木望年会	
12月29日(木)~1月3日(火)の間たこの木ひろばは不在です				
2017年1月				
6	金	19:00~21:00	当事者の会新年会 (18:50 調布駅中央改札口集合)	
10	火	19:00~	フィットする支援をめざす会	たこの木ひろば

※関心のある事や気になる事がありましたらいつでもたこの木まで
お問い合わせ下さい。

※詳細は、たこの木ブログをご覧下さい。<http://takonoki1987.seesaa.net/>

※たこの木クラブのホームページのURLが変わりました！

<http://takonoki.web9.jp/> ←お気に入りへの登録変更よろしく！

※最近、個別の対応でたこの木ひろばを不在にしている事が多い状況です。
訪問並びにご相談のある方は事前に連絡を頂ければ幸いです。

たこの木通信にご投稿お待ちしています！

※B5版1枚単位でお願いします！！

※ご投稿の締切は第3木曜日の前の月曜日。

但し、ページ割の都合上、ご投稿される方は、発行月の前月末までにご連絡を！

※連載投稿者の皆様へ：休

載される場合はできれば前月末までにご連絡ください。

PDF版たこの木通信DVD廉価版絶賛販売中！ 1枚4800円

●たこの木通信PDF版お届け中

通信のページ数並びに発行部数が増え続ける中、1日作業では終わらない状況が迫っています。よろしければPDF版で受け取り可能な方はお申し出ください。

●たこの木通信の発送作業を手伝ってください

毎月第3木曜日(概ね10:30~17:00)多摩ボランティアセンター永山分室にて行っています。飛び入り歓迎！少しの時間でもOKです

書籍紹介

※『ズレてる支援！』(生活書院)2300円+税 ←重版決定！なぜか売れてます！！

※『良い支援？知的障害／自閉の人たちの自立生活と支援』(生活書院) 2,300円+税

『支援』Vol.6特集 特集1=その後の五年間 特集2=くう、ねる、だす(生活書院)1,500円+税

『支援』Vol.1~Vol.5も好評発売中！

知的障害者が入所施設ではなく地域で生きていくための本 ピープルファースト東久留米

物語としての発達/文化を介した教育 津田英二

※たこの木ひろばで、絶賛販売中！！(会の活動資金になります)

※たこの木ブログのAmazonから入って購入すると、たこの木に売り上げの数%が入ります。

記載された本以外の注文でも同様なので、ぜひAmazonでご購入下さいを！

サービス利用計画作成に関する情報・重度訪問介護にまつわる情報を寄せください

利用者・相談支援事業関係・各サービス提供 事業所関係者の皆さんへ。

重度訪問会議を巡っては、間違った(意図した誘導?)情報から本来の趣旨とは異なる対応や使われ方があるようです。まだまだ始まったばかりの類型故に、ぜひ情報を共有し、当事者の自立生活支援に有効となるものにしていきたいと願います！

様々な立場からの、情報を是非たこの木クラブまでお寄せください。

テレホンカード販売中

災害時、携帯よりも公衆電話の方がつながりやすい！500度数=400円でお分けします。

NTTの固定電話をお使いの方は電話料金の支払いにもご使用出来ます。

*未使用・書き損じハガキを譲って！

*ガスコンロ(都市ガス用)・洗剤、タオル募集中！



第4回たこの木 もちつき大会

今年度も当事者Sさん企画で
もちつき大会をします。
参加したい方は、たこの木クラブ
まで連絡をください。

日時 2017年2月5日(日) 10:00~15:00くらい

場所 旧加藤家 多摩市南野2-13(一本杉公園内)

参加費 1000円くらい

行き方 ①多摩センター駅から豊ヶ丘4丁目行きバス～

→「恵泉文学園大学入口」下車徒歩10分

②永山駅、聖蹟桜ヶ丘駅から多摩センター駅行きバス～

→「恵泉文学園大学入口」下車徒歩10分

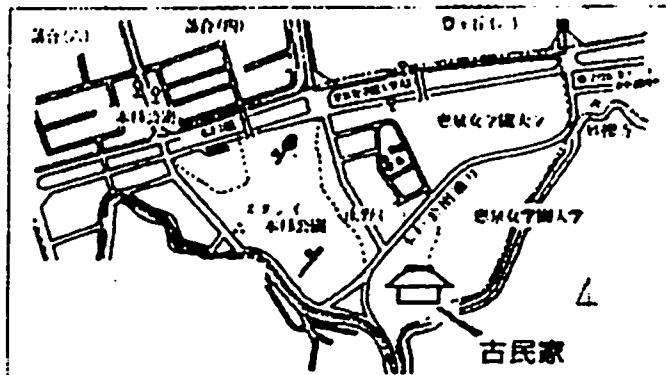
もちつき大会 2017年

2月5日 日曜日

はしょ 体すき公園
旧かとう家

10時3時まで

きなこあんこやどうじょうじゅ
あやうになつとうたんこんあるし



低め安定通信 (13)

鏡田

・健康について

師走の今日この頃みなさまいかがお過ごしでしょうか。寒いせいか周りでノロだの風邪だの騒がしくなってまいりました。体調には十分気を付けてたいですね。ちなみにわたくし今まで一度もノロやインフルエンザの類にかかったことがありません。ついでに突き指も骨折もしたことがないのでまだバレリーナになるチャンスがあります（人生何が起こるかわかりません）

実は健康マニアなわたしは、いろいろな書籍やネットの情報を取り入れてマニアックな生活を送っています。毎日使う調味料は無添加のもの、お米は無農薬の胚芽米、シャンプーは天然成分、パジャマはオーガニックコットン、寝る前は養命酒……。こだわりだとキリがありません。特に食べるものには気を使おうと思い、ある本に「肉を食べると血が汚れる」と書いてあったので一時期お肉をやめたことがあります。ああ肉食いてえ。でも健康の為に我慢だ！ 会社の人が心配して、肉も少しは食べたほうがいいよと言ってくれたときも、「いやあおばあちゃんの遺言で肉は食べられないんすよ」とか言って適当にごまかしていました。

ところがですよ。日本の食の歴史について書かれた本にこんな記述があったのです。日本では昔、穢れの思想というものがあって、死とか血とかは穢れているから近づいてはならん決まりがあった。だから肉は食べなかつたし生き物を殺してさばく獵師とか漁師は穢れが多い人だとされた、と。

血が汚れるって血が穢れるって意味だったんだ！ むむ。悪気なくやつたことでも差別と繋がってたりするんだな、と神妙になるやら馬鹿らしくなるやらですぐにお肉解禁しました。よく考えたら長寿の人が多い沖縄では豚肉めっちゃ食ってるし、身体に悪いことはなさそうです。

大きな病気をしない代わり、ひどい肩こりと低血圧で身体がだるい毎日です。それでも健康マニアを自負してせっせとヘナで白髪を染めます。一日でいいからああ今日は一点の疊りなく体の調子がいい！ と言ってみたい。マニア活動意味なし？ O.S.はいろいろと大変なんです。

自立できない人の自立生活——決められない人の傍らから

第6回 決められた病院での生活（2）——生活の場所

長谷川 唯

◇そっと見守る女性との出会い

支援をはじめてから、看護師さんたちに「あなたたちは一体どのような立場なんですか」「Sさんのケア（食事介助や車いすへの移乗など）はしないでください」と言われてきました。病院において、私たちは決して歓迎される者ではないことを実感してきました。でも、書いてきたように、Sさんが安定した入院生活を送るためにには、私たち支援者の手は必要でした。

支援を始めてしばらくしたころ、夕食の時間になると食堂で必ず見かける年配の女性に気付きました。その女性は、誰かの食事介助をするわけでもなく、だけど誰かを見守るように立っていました。そして食事の時間が終わると、食堂に残って男性の患者さんとテレビを見てから帰っていきます。直感的にその患者さんの家族だと思いましたが、その患者さんの世話をするわけでもなく、ただ食事の時間に一緒にいてテレビを見て帰るだけだったので、どういう関係なんだろうなと不思議に思っていました。あるとき、その女性から「いつもご苦労さま」と声をかけられたことをきっかけに、話をするようになりました。話を聞くと、女性はやっぱり男性の患者さんの奥さんでした。奥さんはいつもパート終わりに病院に立ち寄って、一緒の時間を過ごしていたのです。

◇生活の場所

この「一緒に時間を過ごす」という話が私にとって印象的だったのは、一緒に過ごすことそのことが、その生活にとってとても大事で必要なことだということです。その女性は、食事介助や車いすの介助など積極的に何かをしているわけではありません。ただ一緒に時間を過ごす。この一緒に過ごすというのは、字義通りその場にいるだけというのではなく、そばにいるよというあたたかい視線とメッセージを男性の患者さんに向けてながら時間を共有していました。よくよく考えてみれば、友人や家族との時間は、生活の中で安らげる時間もあるはずです。そしてそういう時間が生活には必要だということが、私には発見でした。

そんなあたりまえのこと気に付けなかったのは、ひとつには病院での生活を日常と切

り離して考えていたのだと思います。入院している患者さんの中には、家族を介護から休ませるために、あるいは検査のために一時的に入院している人もいれば、家族やケアをする人がいないために入院している人もいます。一時的に入院している人は入院期間が決まっていますが、そうではない人たちは退院がありません。言い換れば、病院が生活の場所になります。そして病棟にいる患者さんの多くが、そこを生活の場所にして暮らしていました。その男性の患者さんも病院が生活の場所であり日常でした。女性の話によれば、夫婦二人で生活しているため旦那さんの介護をしながら生活するのは、金銭的にも体力的にも厳しいからとのことでした。少しでも旦那さんと一緒にいる時間の大切にしようと、毎日病院に通っていたのです。一時的な入院であれば、家に帰るといつもの日常生活が再開されます。ですが、そこに入院するしか選択肢がない人にとっては、病院での生活が日常生活でもあるのだ。そういう意味で、私にとっては大きな気付きだったのです。

もうひとつは、ケアする家族がいなければ地域生活の道が開かれないことに対して疑問を持って始めた支援だったのに、わたし自身に家族がケアする存在だということが染みついていたのだと思います。最初にその女性を見たときにただ一緒にいるだけで何もしていなかったから、私は不思議に思いました。ここには、家族だから積極的に介助を提供できるというイメージと、家族は積極的に介助を提供するというイメージが出来上がっていました。これは、看護師さんたちに再三にわたって言われ続けてきたことの裏返しで、実際には私の中にも「家族」は歓迎されるという考えが根付いていて、その表れでもあったのです。

地域だと、社会資源の不足から家族に介護負担が集中していることが目に見てわかるので、家族介護を前提とする考え方に対する疑問を持ちやすいのですが、病院だとそれ自体が覆い隠されてしまいがちです。障害や病を持つ人たちにとって「介助」は日常の一部分であり、切り離せません。でも、家族だからそれを担うことが歓迎されることと、家族にしかそれを担うことが歓迎されないこととは決定的に違います。そもそもそれをよしとするかどうかを決めるのは、介助を受ける患者さんであるはずです。でも病院では看護師さんたちに、決定権があります。そのため、患者さんの生活や私たちの存在は、いつも看護師さんの判断に委ねられていたのです（つづく）。

岩本通信 60

岩本…

片桐さん…

印南…

-  これ作ってみてご覧。煮込みラーメンですね。これは西八ゆい泊りです(笑)
 おはよう。昨日は返信できなくてすみません。いろいろ忙しかった。ラーメン、いいね。
作ってみようか!

-  今日服装が
上着と半袖だから
めっちゃ寒いよ
今家だよ
 そう。今日寒くなるって天気予報で言って
たでしょう!
 知らなかった
 明日も寒いよ。
 気を付けます
 風邪ひかないようにね。
 風邪?→ひいてはないよ
 そうだね。でも気をつけて。

-  ひのくんのキャラクターだよ
 ひのくんなんているんだね。
 今京王八王子だ。
明日畠仕事の後、西八ゆい泊りです(笑)
 明日は天気、大丈夫かな?
 明後日木曜日はまた雨だ
 そっか~。この頃雨が多いね。
 高木さんが雨を呼んだみたいだね
 高木さんは、雨を呼ぶ人なの?
 そうだよ高木さんの当番の日は雨だらけだ
よ♪

-  相模原駅に20時30分橋本駅北口行まで時間があるよ(笑)
 また、遅くなるね。今、飯田橋で飲んでるよ。
 法政大学に21時35分発西八王子駅南口行に乗れたからラッキーだったよ今家の近くの
コンビニ寄ってるよ(笑)そのバスは最終バスだよ
 まだ帰っていない?気をつけて帰ってね?

-  5時59分頃地震発生
 かなりゆれたね。目が覚めた!!
 私もだよ♪今から例の事務所に行くよ
 今、授業が終わったよ。今日はこれから全国連絡会事務所に行くよ。

-  厚木市に恩田と言う地名があるの知ってる?
 厚木に恩田という地名があるのは知らなかったなあ。八王子の高尾の北の方に恩方という
地名があるのは知っていたけど。
 これの事ですか?



 おっ(° 口°)。まさに。さすが岩本さん。

岩 一昨日日曜日

☆☆☆☆さんの乗った

聖蹟桜ヶ丘～桜80南大沢行でね

寺本さんの顔がそっくり似てるよ

(笑)

印 今まで、寺本さんに似ている人は見たこと
ないなあ。一回見てみたいなあ。

岩 おはよう

岩本通信が

今月号持ちまして

60回迎えます

岩 ブルージャックポットと変なメダル



印 ブルージャックポットの写真色が綺麗ですね。
変なメダルは他のゲーセンからの迷子かな。

印 60回ということは5年間続いているということですね。

長いですなあ。

日々の日通信 19 印南

これといって生活に変化はない。いささか寒くなったので、原付で作業所への通うのが身に堪えるようになったくらいであろうか。風邪はひいていないし、体調にも変化はない。

心の状態にも変化はない。これはいいことらしい。診察の時に主治医に「どうですか?」と聞かれ、「特に変わりないです」と答えると、「それはいいことですね」と返される。私の病気は薬によって劇的に変わるということではなく、自然治癒力に任せる他はない。簡単にいえば、私の脳みそは病気の後遺症によって幾ばくかの回路が目詰まりを起こしていて、流れが停滞している。これをゆっくりとほぐす必要がある。ストレスとならない適度な環境でじっくりと熟成させる。道のりは長い。20年、30年のスパンがかかると医者は言う。平凡な日常の積み重ねの先に回復がある。



変化がないと言ったが、ここまで書いて思い出した。一つ変化があった。朝少しあはやく起きるようになったことだ。作業所に行く前の1時間半を創作活動に充てている。「退屈なほど規

則正しい生活を送ろう。それが、何かを成し遂げる唯一の方法だ。」その言葉を胸に刻み、11時には布団に入るようとした。10日ほど経ったがこの習慣は続いている。(ちなみにこの言葉はアーティストの Austin Kleon という方が示した若いクリエイターに向けたアドバイスの一節である。この他にも幾つかの心得がライフハッカーのウェブサイトに乗っている。)

日常は単調にみえてもそこには起伏があり、昨日とは違う景色がある。朝方に生活をシフトするようになってそのことによく気づくようになった。ささやかかもしれないが、これは、すごくいい変化だ。

岩本 片桐さん 印南



世界の片隅で支援をつぶやく 24

介助者の声を聴く

自立生活センター・リアライズ
長瀬 翼

前回、僕らのセンターでは、介助者の個別の聞き取りを行っていることを書きました。うまくいっていることばかりではありませんが、少なくともこの聞き取りを続けてこなければ、もっと状況は大変だったのではないかと思っています。

これまで何人かの介助者から「この聞き取りがなければ、もう介助を辞めていたと思います」と言われたことがあります。もちろん、それでも辞めていく人たちはいます。けれど、孤独になりがちな直行直帰の1対1の介助を続けていく上で、自分の存在が誰かに支えられているという実感は大切です。

「目の前に当事者がいるのだから孤独じゃないだろう」そんなふうに僕は始めの頃は思っていました。でも、そこにはなかなかつながりを感じにくい状況があるのだと思います。

こうしたことを介助者の聞き取りを通じて僕は少しずつ理解していました。

しかし、そんなふうに最初から僕が聞き取りを大事な取り組みだと思っていたわけではありません。むしろ、僕は介助者の聞き取りを行うことは消極的で、当事者の声を聞くという思いはあっても、介助者の声を聞く必要性をあまり感じていませんでした。

そんな意識だったので、聞き取りを始めてから最初の数年間は、話が噛み合わないことも多く、僕は介助者の言い分にイライラすることもありました。介助者たちが口にする不平不満、介助のしんどさ、そんな話を聞いていると、目の前の障害者の置かれている状況をあまり考えていない人たちのようにも感じられました。

このままでは障害者がますます苦しい状況になると思い、介助者たちに厳しい言葉をぶつけることもありました。

その結果、介助者の多くの割合を占めた学生たちは、僕に対して「この人には何を言っても無駄」、「自分とは感覚が違い過ぎる人」と思われていたようです。

今から思えば、学校に行っていなかった僕と学生の介助者たちが信頼関係をつくっていくには、それなりの時間が必要だったのかもしれません。

そんな僕の聴き取りの認識が変わっていったきっかけは、女性のコーディネーターが育休に入ったため、僕が女性の聴き取りの一部を担うようになったことです。

女性の介助者たちは男性に比べて大変そうに見えました。介助者が大変ということは、その介助者が介助する障害者も大変になっていることが想像できます。

僕は女性の聴き取りをするようになってから意識し始めたことがあります。年上の男性の僕に女性が一対一で話をするという状況そのものが生じさせる緊張感や不安を極力感じさせないように気をつけること、男性の介助経験を単純に当てはめても異なる部分が多くうまくいかない場合があること、この二つです。

以上のことをして聴き取りを進めていくと、それ以前よりも介助で生じる人間関係のいざこざについての話を、相手の話を遮らずに聴けるようになりました。そして、聞きっぱなしではわからないことは、僕自身の例を引き合いに出すなどして相手との違いを確認しつつ話を進めていくスタイルに変わっていました。

そうすると、会話の内容がこれまでとは異なる展開をすることがあります、僕が思い込んでいたものとは異なる現実が立ち上がってくることが度々ありました。

当たり前の話ですが、介助は相互にやりとりを交わすことで成り立っています。双方の声を聞いていかないとわからないことがあるはずですが、現実はどちらか一方になっている場合が多いです。

介助者の聴き取りを通して、人間関係のトラブルの原因の大半は、互いの認識のズレから生じていると考えるようになりました。

しかし、どちらも相手の言動だけに意識が向かい、そこに関与しているはずの自分の言動は抜け落ちています。互いの認識のズレに気づくためには、渦中の当事者同士では難しいこともあります、他者の介入が必要な場合があります。

障害者、健常者、双方の介助のつらさをどこかで聞く仕組みがなければ、互いの生きづらさが共感につながらず、逆に摩擦を生じさせ、場合によっては排斥し合うものにもなりかねません。

自分とは全く異なる他者と長時間の見守り介助を含めて一対一で過ごし、更に身体接觸もある状況で守秘義務が課せられている、何のサポートもなければ介助を続けることが難しくならないほうが不思議なくらいなのかもしれませんと今は思っています。

当事者支援の制度をめざして！！

第104回
岩橋 誠治

【支援団体とサービス提供事業所の狭間で 2】

本人の意思に反して施設や病院での暮らしを強要される。本人や家族の意思に反して普通学級の場から排除される。何ら支援を受ける事なしに就労できない状況等々。私たちに許されて障害故に排除される現実に抗する事に長年取り組んできた。全国各地で取り組まれている人々の出会いは「しかたがない」ではなく様々な可能性が示され、今すぐ実現できなくても可能性はどこかにあると思わせてくれる。

何かに「抗する/抗して」という取り組みは、対象となる相手や課題が明確な分、想いを同じくする人たちとつながり展開するエネルギーを得られる。

ところが、当事者個々の想いがどこにあるのか？その想いを実現するにはどうすれば良いか？そもそもその想いは、他の選択肢との比較によるものなのかそれともそれしか知らないだけなのか？などと考え始めると何度も何度も袋小路に陥ってしまう。

長年個別に関わり続けてきた当事者たちの想いは、様々な事柄を共有している分想い描けることはたくさんある。しかし、新たな人が関わる事で違った面を見せる当事者を前に、私自身が想い描いてきた事と本人の想いが共有されているのだろうかという疑問を抱く。

「本人には選択肢がない」と、様々な場面に連れ出そうと試みるも、本人は既に自らの要望が明確で想いの実現を支援して欲しいと願っているにもかかわらず、「選択肢の提供」等とこちらが当事者を連れまわせば至極迷惑な話。さらには圧倒的な力を持つ私に従っているだけかもしれないと思ってしまう。とはいえ、他にも選択肢がある事を知らないために「仕方がない」とあきらめている場合もあるのでややこしい。

一人一人の当事者の想いを明らかにし実現していく事を願うも、当事者の想いがどこにあるのかが解らず日々悩む。それこそが「地域で暮らす」という事であり、誰しも常に明確な意思を持って暮らしているわけではないから、互いに悩みつつも関わり続けられる関係に感謝しなければなどとも思う。

このような想いは今に始まった事ではなく、発足当初から内容は違っても常に悩み続けてきたように思う。ただ昨今思うのは、当事者の想いを明らかにするにしても当事者とともにあれこれ悩んだ先にある想いを実現するにしても、そこに関わる担い手の多くがサービス提供事業所を介してなされるという点。

サービスを担う人たちにも同様の暮らしがある。「仕事」として関わってもらう事で回る当事者の暮らしがある。その一方で、「仕事」としての身の関わりでは当事者の暮らしは広がっていない。「やりがい」等というもので担い手を縛る事はおかしいと思う一方で、単に「仕事面」だけでなく「障害当事者と関わりたい」という想いに至って欲しいとも願う。

振り返れば、たこの木を始めたきっかけは「障害の有無で分けられる現実」を何とかしたいと思ったから。その一方で「分けられようとも、地域で暮らし続けるために必要となる支援の構築」と言った面もあり、支援団体としての活動とサービスを提供する事業所との両者を行ったり来たりする日々。

【差別解消法はできたけど・・・】

本年4月に障害者差別解消法が施行されました。しかし、その後目につくのは差別を助長する動きばかり。成年後見制度利用促進法や個別カルテの話は以前取り上げましたが、最近富に感じるのは、サービス支給量や利用内容の制限を巡る話。

例えば、移動支援についてみると、

- ・要綱上は認められている対象者がHP上の案内では対象になっておらず、当事者の申請に対し、HP上の案内をもって申請を受理しない。
- ・通勤通学通所という「通年かつ恒常的な移動支援は認めない」としてきたが、イレギュラーな事態についてはこれまで認めてきた行政。しかし、いつの間にか「通勤通学通所」というだけで、本人の暮らしの実態に関わらず利用を認めないと言われた。

例えば、重度訪問介護は、「見守り」も含めて「常時介護を必要とする者」となっているにもかかわらず支給量が制限される。さらに、移動加算については、当該市の移動支援に倣い加算量を決定するという話。余暇活動として移動支援の上限を定める当該市の支給量は、一人暮らしを営む人の外出の実態に則していない。

例えば、日中をいかに過ごすかという点で見れば、就労継続支援や就労移行支援や生活介護等を組み合わせる事もありだと思う。事業所の側は日割りで計算しているのだから利用者も様々な場を利用できればありがたい。ところが、週4日ないし5日の利用がなければ受け入れられないとする事業所は意外に多い。これは事業所の問題というよりもまとまった利用でなければ受け入れられないという制度上の問題だと思う。

又、生活介護を利用する人は就労継続や就労移行を認めないという自治体も意外に多い。その理由は「生活介護を利用する人は就労する能力がない」という事らしいのだが、本人の能力によって振り分け、事業名だけで判断し各事業所の内容を把握していないこれまた行政の問題と思う。

その他にもあれこれ挙げれば限がない。不策も含め行政に課せられている差別解消の義務は、どこに行ったのか?「障害者差別」と紋切型で行政を追及するというつもりはないが、自らの不策に目を向けることなく、「市民啓発」等を掲げ「人々の気持ちのあり様」に落とし込んでいく取り組みには納得がいかない。

移動の機会・選択の機会を奪われ、想いの実現に向けた支援を得られず、結果地域の中で出会いの機会を奪われる状況下で、「差別はいけません」というに留まるのはまったくおかしな話だと思う。

障害当事者だけでなく障害当事者たちと関わる人々も汲々と追いつめられる現実。関わり続ける事の喜びよりも、関わり続ける事のつらさを抱けば、向かう方向は差別解消ではないだろうと思う。

行政のあり様のみを責めるつもりはないが、行政が果たすべき責任を横に置き、市民に対して「差別解消」を「啓発する」という事については甚だ疑問を抱く。又、行政の無策を棚に上げ、各事業所の努力に頼れば、追いつめられる事業所は当事者を切らなければ自らが成り立たないという苦渋の選択を強いられ、これまた差別解消とは真逆に動かされているように思う。

【支援の連続性を考え始める】

知的当事者の支援は、複数性を持って担う必要があると常々考えている。昨今、総合支援法における様々な事業が生まれそれを組み合わせて地域で暮らす当事者たち。複数のサービスを利用する事や一つのサービスに対しても複数の事業所が関わる事の必要をこれまで書いてきた。そして、それらを相談支援事業所が統合していくという話も書いてきた。

たこの木周辺で一人暮らしをしている知的当事者たちは、毎月各事業所が集まり支援会議を開いている。それぞれの関わりを共有し、他者の関わりを参考にしつつ、自らの位置や担い方を検証する場として必要な事だと思っている。

自らが語れない知的当事者の場合、実際の場面をお互いが共有する事で、「とりあえず」立てたサービス内容を担う中で当事者の想いとの差異を明らかにしつつ修正し続けるものもあると思う。複数の事業所や複数の関係者が存在する事で、様々な視点から当事者の想いを探る事を可能にし、各々が思い描く当事者を出し合う中でより当事者の想いや望む暮らしに近づけるのだろうと思う。

しかし、その実際は自らが提供するサービスのみに終始せざるを得ない状況。そのため複数の事業所が関わる事で当事者自身は混乱するという場面も最近目にすることになった。

「当事者本人を中心において」と言うのは聞こえが良いが、実は「当事者を真ん中において事業や支援者たちで取り囲む」というのであれば全く意味が変わってくる。利用計画に掲げられた「目標」は、あくまでも「支援の側の目標」とこれまで言ってきたが、その「支援の目標」も個々に担っていたら、その一人一人に対応する当事者は非常にきつい話に思う。

生活の場も日中活動の場もさらには余暇に至るすべての支援を一法人が担うという事の危険性をこれまで語ってきた。複数の事業所が関わる事はとても大切な事だと思う。

一人暮らしにしてもグループホームにしても、異なる考え方を持つ法人や事業所が関わる事によって得られるものは大きいと思う。

さらに、居宅介護という一つのサービスについて見た時も、これまた複数事業所によって担う事を進めてきた。一事業所で担っていては、利用者である当事者はその事業所の都合に逆らえないばかりか、万が一その事業所が担えないとなった時、たちまち自らの暮らしが閉ざされてしまうため、複数事業所の関わりはとても重要だと思う。

ところが、最近それだけで良いのだろうか?という疑問を抱いている。

各事業所に余裕があればお互いが担う役割にほんの少しのりしろをつけて他の事業所との連携を図れると思うが、そんな余裕が年々削られ、自らの役割のみに終始する事態になっているように感じる。そんな中で複数の事業所とやり取りしている当事者たちは、事業所や担い手たちによって自らの暮らしを輪切りにされ、各事業所や担い手たちに合わせた暮らしを強いられているように感じる。

私自身は、複数性というものはとても重要と思う。それをいかに連携させていくかという課題だと思うのだが、「統一された支援」という事でもないように思う。

「支援を統一する」という事は、そこからはみ出るものは否定される。しかし、各自が勝手に支援していくは、向き合う一人の当事者にとっては常に複数の担い手の相手を強いられるようにも思う。一方様々な担い手の存在は、当事者の世界を拡げる機会にもなっていたりするのでややこしい。

当事者の暮らしは常に連続している。その一方で支援の側は常にその場のやり取りを担っている。その非対称を思う時、「支援の連続性」なるものがいかなるものかをあれこれ考え始めている。

シセツ職員もつらいよ(10)

荒木 巧也 (CIL 介助者)

年に一度のチャレンジ

久しぶりに施設に暮らす友人に会った時のこと。2人とも自立生活への希望があり、介助者を始めて1年経って、何かいい助言や提案ができればいいと思っていた。以前と変わらず2人とも頑張っていて、助言なんてできない。必要なのは、末永さんがよく言うように「誰が責任を取るか」という支援側の覚悟のようなもので、本人たちは十分すぎるくらい、制限の多い環境で自分らしい生活を作るために頑張っている。

9月のピープルの大会。会場に着くと、知り合いが駆け寄って「どこに居たの？Sさんが大変だよ！」と慌てている。「介助者の荒木、至急受付前に来るよう」と館内放送もかかっていたそうだ。早朝施設を出発するために絶食状態で倒れたとか、車いすごと階段に落ちたとか想像した。受付前で電動に乗ったSさんが弱々しくほほえんでいた。本人としては「受付をしたいのに、介助者がいないと大騒ぎになって困った。受付させろ」

Sさんの自立＆自由な生活への思いは強く、CILで生活体験をしたり、1人で夜の名古屋の街に出かけて迷子になり警察に保護されたりしてた。介助者もなく単独でできることが、訓練でもあり自由を感じられる時間なのだと思う。そもそも長時間1対1で人が付くことは（現在はできなくなった）年に一度の旅行くらいしかなく、地元のCILに相談するとヘルパー不足の話ばかり聞くので「ヘルパーは最小限しか付かない前提で生活できるようにならねば」と考えている。神戸大会では、受付で事前申し込みしてないと分かり手続きしようとすると「自分でやると決めてきた」と言って1人で受付に。数人のボランティアさんが熱心に付き合ってくれて受付を済まし、介助者の名札などを渡してくれた。

Sさんは施設暮らしを「ぼけた生活で自分がダメになる」と言う。昔は身体障がいの団体のイベントによく行っていたけど、今はピープルの大会が一番楽しみらしい。意思疎通が難しいだけでなく考え方をまとめるのに時間もかかることもあり、小難しい？身体当事者の話よりピープルの雰囲気が合うようだ。あと自分のコミュニケーションに付き合ってくれるという安心感もあって、受付を自分でするのが年に一度のチャレンジでもあった。

本人の思いとはうらはらに「周りから心配される」条件が揃いすぎて自由行動ができない。電動イスの動きがフラつきキーボードの文字もゆっくりで伝わりにくい。本人の意志とは関係なく普通の顔が「困っている」表情に見える。そのへんを「心配されない見た目」にするのも支援なのかと考えたり。名古屋駅で介護タクシーを待つときに念のため「何かあれば電話下さい」と僕の連絡先を貼ったら、女性から「困っているみたいだけど大丈夫ですか？」と電話がかかってきた。日本も捨てたもんじゃないと思いつつ、Sさんの「心配させる能力」の高さに感心した。

右の写真は、もう1人のTさんの無線でPCの操作ができる自作装置。電動車イスに付けたスイッチの信号を赤外線で送る。移動とPC操作はできてもケーブルの抜き差しに人を呼ぶか待たなければならない。1日最低4回はあって本人も職員もイライラポイントになる。10年来の課題を県の福祉用具センターに相談を続けて解決した。

長時間の介助ばかりしていると「介助者がそばにいる」ことが当たり前になっていて、「1人でできなくていいのに」と思う。CILでよく言う「介助者に指示を出してうまく使う」ことができなくて、指示もテキトウでうまく使えてなくても自立生活をちゃんとしてる人たちがいるので、2人にはぜひ見て欲しいと思う。同時にSさんの「努力」というか「生き様」も伝えていきたいと思う。 感想など arakitakaya@gmail.com まで



当事者の会新年会

日時 1月6日(金)

集合場所 調布駅

中央改札口 PN 6時50分

調布駅の居酒屋 18:00~9:00

割り引き3000円

どうぞお

たこの木アゲ

042-389-1378

ちあくふざけ

0424-87-4655まで

フィットする支援をめざす会

岩橋 誠治

【それでも支援し続ける】

ネット検索していたら「【特集】『累犯障害者』の更生どう支えるか 地裁判決の事例報告」という記事が目に飛び込んできた。(共同通信 47 NEWS 11/24 <http://this.kiji.is/174414554477477896>) 又、後日見つけた「障害者の再犯防止模索 社会復帰地域支援少なく(YOMIURI ONLINE 10/16 <http://www.yomiuri.co.jp/osaka/feature/CO023571/20161016-OYTAT50002.html>)

記事のトーンは「福祉関係者による手厚い支援体制の中で、再び起きてしまったケース。支援と言っても、「一筋縄」ではいかない難しい事例」という「更生の難しさ」を物語っている。

「出口支援」という「出所後の支援」の必要性をしばしば耳にするようになった。「出口支援」があればこそ公判並びに判決に向けた「入口支援」という展開も始まっている。

しかし、どれほど手厚く支援がなされても「100%防げない累犯」という事態はとても悩ましい。それでも「支援のミスだった」と語る法人の理事長。私たちも同様に「私たちのミスだった」と言えるだろうか?

以前、ここに登場する理事長を招き講演していただいた。又、法人を訪ね見学もさせてもらった。地域住民の方々に理解を求め、地域住民との関わりを大切にされてきた支援者たち。又私たちとは違い、事柄を意識化するための学習会等を現場から少し離れた人たちとも考え方組んでいる。矯正施設でもなく、精神科病院でもなく、地域の中で関わり合う中でその先を紡いでいこうとする人々の存在はとても大きく思う。

当事者の周囲にいる人たちがどれほど懸命に関わっても結果が伴わない時の落差。しかし、それでも担い続けようとする姿勢に頭が下がる。そして、私たちも同様に取り組めるだろうか?取り組み続けるにはどうすれば良いかと考える。

私はこの記事の内容を確かめるべく電話を入れた。電話口に出てきた理事長の第一声は「下手うちましたわあ~」と。そのトーンを言葉で表現するのは無理ですが、様々な事がその一言に込めて語られた気がしました。そしてその第一声を聞いて「他人事ではなく、私たちの課題もあるので、改めて一緒に考えさせてください」というしかなく、実に失礼な電話であったでしょうが、記事とのつながりを確認して早々に電話を切りました。

「全て支援の側の責任」ではないと思います。しかし、「すべて当事者の責任」でもないと思います。そして、どちらがより責任があるかという話でもなく、それぞれがそれぞれに果たすものが何か?という面と、当事者が責任を負うための支援が何か?という点で、考えなければならない事が途方もなくたくさんあるように思います。

「出口支援」「入口支援」など単純には括れない何か。「支援しきれない」と支援を止めてしまうのは簡単だけど、当事者は別の場所で私たちとは異なる何らかの関わりの中で暮らすだけで、私たちには見えなくなるだけの話。そう思うと、「それでも関わり続ける」スタンスをいかに持ち続けられるか?

重いし、複雑だし、先が全く見えない事だけど、これまでの取り組みの結果を結論とせず、次なる結果を求める何をどのように取り組めば良いか、ぜひ再びお招きしてともに考えたいと願う。

※次回の例会は1月10日(火)19:00~ たこの木クラブにて

※面会のために交通費や会の活動に費用が掛かります。ぜひカンパもよろしくお願ひします!!

もくじ

・表紙	1
・1月の暦	2
・2016年を振り返れば・・・	3
・知的の人 7	4
・役に立つ話ふたつ	6
・今年もお世話になり ありがとうございました	7
・私の個人的「介護」史 (17)	8
・「男は走る」	10
・『あしたや共働企画&たこの木クラブ』	11
・全国公的介護保障要求者組合講演会報告～その2 65歳問題	12
・不安を抱き続けようと思った(ほんの紹介、8回目)	14
・たこの木インフォメーション	16
・第4回 たこの木餅つき大会 お知らせ	18
・低め安定通信 (13)	19
・自立できない人の自立生活 一決められない人の傍らから	20
・岩本通信 60 日々の日通信 19	22
・世界の片隅で支援をつぶやく 24 ~介助者の声を聞く~	24
・当事者支援の制度をめざして 104回	26
・シセツ職員もつらいよ (10)	29
・当事者の会 新年会	30
・フィットする支援をめざす会	31
・もくじ・編集後記	32
付録 ねじり草 第93	
・かんじさん自立生活への道④社会からのドッカンをどう受け止める?	2
・すいいち日記 2016/12	3
・インフォメーション	4

編集

- ・2016年があっという間に過ぎていく。自分でも訳が分からない日々。でも、様々なトラブルや厳しい状況があっても、地域にしがみついていれば、なんとかなっていく感もある。当事者たちと地域で過ごす日々があるからこそ悩み続けるわけだが、日々の出会いが無くなった途端に関わりが切れてしまう関係である事を経験上思う。
- ・とにもかくにも関わり続ける事だけはやめないようにしたいと思う。
- ・とはいいうものの、関わりきれなくなってきた現実をどうにかしていかなければならないと思う日々。自らの取り組み方も含めて考え直さねばと思う。せ